



目次

キャラクター紹介 3ページ

あの日夢見た海に 4～17ページ

悪魔に恋しちゃダメですか？ 18～22ページ

春色コンダクト 23～33ページ

あとがき 34ページ

あの日夢見た海に



あげは



しろ



るり

悪魔に恋しちゃダメですか？



りり



ゆうと



さき



あきと

春色ユニガクト

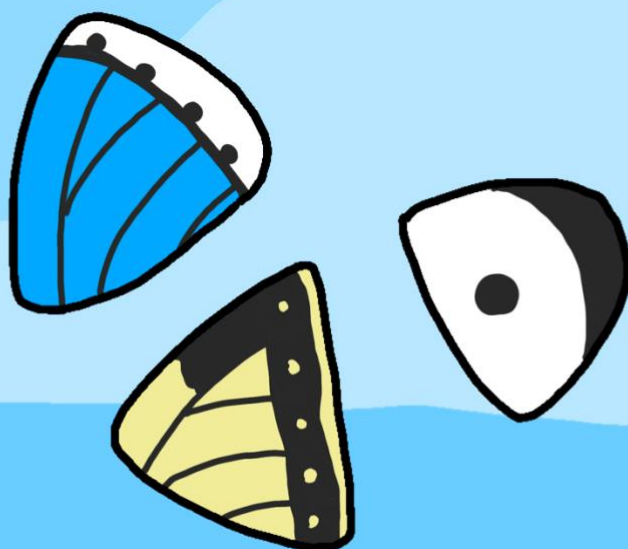


はると



はるか

あの日
夢見た海に



ぼくたちがまだ小さい幼虫だった頃、ぼく——あげはと、しろと、るりは、約束した。

「木の上から遠くに見た海を、いつか、ぼくたちが成虫になったら一緒に見よう」って。

ぼくは、「ぜーったい、一緒に、あの海を見に行こうね！ぼくたち三人の約束だよ！」って

言って、しろは、「わたし、最近太ってきちゃって…成虫になるまでに痩せなきゃ！あと、

運動不足みたいだから、遠くまで飛べるように、今のうちに体力つけなきゃだね！」って言

って、るりは、「じゃあ、おれは最初に成虫になって二人のこと待っててやるよ！安心し

て、ゆっくり成虫になりな！」って言って。

そうやって、三人でゆびきりげんまんをしたりして、笑い合っ

て、ぼくたちは蛹になる直前まで、そんなことを言い続けていた。そして、深い眠りにつく。

三人で一緒に、あの海に行く日を夢見て。

―あげは、しろ、ごめんな。

そんな声が聞こえた気がした。はっとして目を覚ますと、そこはまだ繭の中で、近くには誰の気配もない。るりの声が聞こえたような：気のせいだったのかな。

そう思いながら、自分の手を見る。ちゃんと成虫になれたようだ。ぼくはそれを確認すると、蝶として繭から出る準備を始めた。もう一度、周りに誰もいないことをしつかりと確認して、ゆっくり繭を出る。

隣を見ると、るりの繭はもう破れていた。しろの繭はまだ破れていない。どうやら、るりは、本当に最初に出たらしい。

どこにいるのかな。もしかしたら、もう美味しい蜜のある花畑なんかを見つけているのかも。しれない。きつとりはあとで戻ってくるから、その時に聞いてみよう。昨日どこるかさつきまで蛹だったぼくが成虫になってるんだから、驚くよね。そうだ、るりが戻ってくるまで

に飛べるようになって、もっと驚かせようかな。

そう考えながら羽を少しずつ広げる。先輩蝶から聞いた情報によると、羽を広げ終わるまでは1時間から1時間半くらいかかるらしい。まだしばらくかかりそうだから、この間に、どうやって海へ行くかでも考えていようか。

しばらくたって、ぼくは羽を広げ終わった。試しに少し飛んでみたけど、すごく楽しい！今なら、幼虫の時には行けなかったところでも、どこにでも行けそうだ！早くるりにも見せたいな。…るり、いつ戻ってくるのかな。るりは方向感覚がいい方だから、迷ったってことはない気がする。うん、少し心配だし、探しに行こうかな。

繭があつた木の近くを飛んでみると、青色の羽のかげらのようなものを見つけた。

ここは森だから、もちろん、ぼくたち以外の生物もたくさんいる。でも、なんだか胸騒ぎが

した。いつだったか、るりが、「おれは、成虫になったら綺麗な瑠璃色の羽になるんだってさ。だから、名前がるりなんだよ」って言っていた。まさか、るりの羽？

怖いけど、確かめなきゃ。この羽がるりのものであっても、るりのものでなくても、手がかりはこれしかないんだから。

「るりー、どこー？」

るりを呼びながら羽が落ちていた近くを飛ぶ。すると、また、同じようなものを見つけた。

羽は、森の奥へ、一本の道のように一定の間隔を保って落ちている。

その羽を辿っていくと、やがて、開けたところに出た。そこには、ボロボロになった瑠璃色の羽が落ちていた。ぼくがその羽を見ていると、近くから青虫が出てきて言った。

「きみ、その子のおともだち？」

「わからない。ぼくの友達にもこんな羽の子がいるんだけど、その子のなのか別の子のなのか、これだけじゃわからないんだ」

ぼくがそう返すと、青虫は言った。

「じゃあ、いちおう言っておくね。その子ね、向こうからたくさんの蜂に追いかけてここに来たんだよ。がんばって逃げてたけど、捕まっちゃって……。えっと、たしか：『あげは、しろ、ごめんな』って、さいごに言ってた。」

間違いない。これは、るりだ。ぼくが繭の中で聞いたるりの声は幻聴なんかじゃなくて、本当はるりが言っていたんだ。

ぼくは、落ちている、るりの羽をかき集めた。るりはもう蜂に捕まってしまったけど、せめて、るりの羽のかけらだけでも海に連れて行きたい。

ぼくはるりの羽を集め終わると、教えてくれた青虫にお礼を言って、繭のあるところへ戻っ

た。幸い、しろはまだ羽化していないようだった。しろが羽化して、飛べるようになったら、ちゃんと言わなきゃ。

るりの羽を近くの木の根元に隠して、しろの近くの隠れられそうな大きな葉の下で眠る。明日、起きたらるりがいたりしないかな、なんて馬鹿なことを考えながら。

なんだろう。何かの音がする。まるで鳥の羽撃く音のような……鳥？まさか……！

ぼくは飛び起きた。辺りはまだ薄暗い。葉の下から顔を少し出して、音のする方を見ると……しろの近くで、一羽の鳥が飛んでいた。その目はしっかりとしろを捉えている。今のしろは蛹だから、動けない。

「……ぼくが守らなきゃ」

そう呟くと、ぼくは鳥のすぐ近くに行った。鳥はぼくに気づくと、ぼくのことを捕まえよう

とした。ぼくはそれを避けて、しろが見えない場所まで行く。鳥は、そんなぼくを追いかける。

そんなことをしばらくしていると、やがて、鳥はぼくを見失ったのか、どこかへ飛んでいった。しろは無事みたいだ。

しろを守るために咄嗟にやってしまったけど、すごく怖かった。そりゃあそうだ、命懸けだったわけだから。

「るりも、こんな風にぼくらのことを守ってくれてたのかな…」

きつとそうだ。ぼくらが安心して羽化できるように守ってくれてたんだ。ぼくも、しろが安心して羽化できるように頑張らなきゃ。

その後も、何度か鳥が来た。ぼくはひたすら飛んで、鳥がしろを食べないようにした。

夜、ぼくが寝ようと準備していると、しろが少し動いた。

もしかしたら、明日には羽化するのかもしれない。今日は早めに寝ておこう。

「おやすみ、しろ」

ぼくは呟いて、昨日と同じように眠りについた。

その日、ぼくは夢を見た。夢の中ではぼくたち三人が成虫になって、一緒に海へ向かって飛んでいた。

「ごめんな、あげは、しろ」

るりがそう言って、落ちていく。少し遅れて、しろも落ちていく。二人の体は、落ちながらバラバラになっていく。

「二人とも……っ」

そう言ったぼくの羽も、片方がなくなる。バランスを崩したぼくも落ちていく。

そして、ぼくたち三人は、暗い闇の中に落ちていった。

「るり、しろ……！」

急いで目を覚ます。さっきのは、夢？しろの方を見ると、まだ羽化はしていないが、確かにそこにいる。こないだ隠したところに、るりの羽もあった。

それを確認すると、ぼくはゆっくりと深呼吸した。

その時、しろが動いた。しろが、羽化しようとしている！近くに誰もいないことを確認してから、ぼくは少し離れたところで見守る。

やがて、しろの繭が破れ、しろが……とはならなかった。繭は破れたが、どこか様子がおかしい。しろの羽が破れたところから落ちていった。隙間から見た繭の中には、しろは、いな

かった。代わりに、何かの幼虫がいっぱいいた。やがてそいつらは、糸を吐きながらしろの繭から降りていく。全員が繭から出ていったことを確認してから、ぼくは、繭の中を見た。そこには何もなかった。

小さい頃に聞いたことがある。幼虫に寄生するハエがいると。きっと、こいつらはその寄生するハエなんだろう。

そう理解した途端に、怒りが込み上げてきた。怒りのままハエの幼虫たちを追いかけようとしたが、ぼくはそこで止まった。

ハエたちを追いかけたところで、一体、何が起きるといふのだろう。もう、しろはこいつらに食べられて、どこにもいないのに。

ぼくは、しろの羽を拾った。木の根元に隠したるりの羽も回収する。

「しろ、るり。一緒に海を見に行こう」

二人の羽を抱えて、ぼくは飛んでいく。いつか一緒に行こうと約束した海に向かって。

もうどれくらい飛んでいるだろう。かなり疲れているから、長い間飛んでいることだけはわかる。でも、今はぼくの疲れなんてどうでもいい。少しでも早く、三人で海を見たい。

「!!」

背中に衝撃が走る。振り返ると、ぼくの後ろには鳥がいた。もう一度、鳥がぶつかってくる。その衝撃で、二人の羽が落ちてしまった。逃げなきゃいけないことは、頭ではわかってる。でも、ぼくは、二人の羽を追いかけた。

そんなぼくを見てチャンスと思ったのか、鳥はぼくの羽に攻撃してきた。ぼくの羽が片方、取れた。バランスを崩したぼくは、二人の羽を掴んだまま落ちていった――。

高いところから落ちたぼくだったけれど、幸いにも、特に大きな怪我はなかった。ただ、鳥に取られてしまったため、羽は片方しか残っていない。

しろもりもいない状況では、飛べないぼくが生きていくことはできないだろう。

「二人とも：海に連れて行けなくてごめん」

それだけ言うと、ぼくは二人の羽をしっかりと抱えて、横になった。

すでにだいぶお腹が空いているし、喉も乾いてる。何か食べないとどうなるかはわかっていたけど、別にそれでもいいと思った。しろもりもいない、さらに海に行くこともできないのなら、このままでいい。

本格的に疲れてきたので目を閉じると、上の方から音がした。見ると、さっきの鳥がいた。ぼくのことを追って来たんだろう。鳥がぼくのすぐ近くに来て、ぼくは動かなかった。

そのまま、鳥が口を開けるのを、ただぼんやりと眺めていた。

鳥は飛んでいく。海の上を。その鳥の口から、三つの小さな羽のかけらが落ちる。

それは、三匹の蝶の羽だった。

綺麗な海に、三枚の蝶の羽のかけらが落ちていく。

あの日夢見た海に、色違いの羽がまるで寄り添い合うように、一緒に落ちていった。

2話!

悪魔に
恋しちゃダメですか?

放課後。私たちは優斗くんに昼休みの続きの説明をしていた。

「あ、あたし部活行ってくるね」

「俺も部活行ってくる」

えっ。まさかの、私と優斗くん、二人きり…？

「りりちゃんは、部活入ってる？」

「うん。美術部に入ってるよ。美術部は活動、水曜日と金曜日だから今日はないの」
確か咲希は吹奏楽部で、彰くんは陸上部だったかな。

「部活かぁ。ねえ、美術部って、どんな感じ？」

どんな感じか、って言われると…難しいけど…

「みんなで色々話しながら絵作品を作ってる…って感じかな…？」

「楽しそう！部活って、体験とかできるかな？」

「うーん、どうだろ：明日先生に聞いてみる？」

私が言うと、優斗くんは元気に頷いた。

「うん！明日、二人にも話してみるね！」

「そうだね」

「じゃあ、また明日！」

優斗くんはそう言って少し大きめに手を振ってくれた。私も手を振り返して帰る。

「先生！あの、昨日来た転入生が美術部の体験したいって言ってて…」
私が話すと、先生は笑顔で、

「明日の部活おいで！って言っというて！」と言ってくれた。

「あ、優斗くん、おはよう」

「おはよ！」

「さっき聞いたら、明日の部活おいで、だって」

私が言うと優斗くんは目を輝かせて言った。

「ほんと！？やったあ！明日、楽しみだね！あ、咲希ちゃんと彰人くん来たから、聞いてくる！」

「あ、優斗だ！おはよ」

「優斗おはよー」

良かった、無事に部活動体験できるか聞けてそう。それにしても、もう三人、こんなに仲良くなったんだなあ：まあ、咲希はもとから誰とでもすぐ仲良くなれる性格だし、彰人くんも優斗くんと趣味が同じみたいだし、当たり前前といえば当たり前：なのかも？

そんなことを考えていたら、突然咲希が私の方を向いて言った。

「優斗、りりの部活にも行くって言ってた？」

「うん。今日顧問の先生の許可も得たから、明日来るって」

「えーいいじゃん！あたしも休み時間に聞いてこよ！」

咲希ってば、今すぐにも先生に聞きに行きそう。思いついたらすぐに行動できるのは、咲希のいいところだね。

そうこうしているうちに、もうすぐ授業が始まる。明日の部活は優斗くんが来る。…いつもよりも、さらに楽しい部活になりそう！



4月4日、日曜日。春奏が：私の妹が、亡くなった。あと10日で誕生日だった。

「春音」

名前を呼ばれる。ドアを開けると、お母さんとお父さんがいた。目が赤いから、さっきまで泣いていたのだろうか。

「春音、その：大丈夫か？」

お父さんが尋ねる。大丈夫なわけではない。最愛の妹を亡くしたばかりだから。かといって、あまり両親に心配もかけられない。

「：うん。お父さんとお母さんも、大丈夫？」

「まだ大丈夫ではなけど：たくさん泣いたからかな、昨日よりは平気そう」

昨日、私たちは春奏の葬式を行なった。お父さんとお母さん、そして親戚の人たちはみんな

泣いていた。その中で、私だけは泣いていなかった。悲しくないわけではない。ただ、春奏がいなくなったというのが信じられないというか：信じたくないのかもしれない。泣いたら、春奏はもういないと認めてしまうような気がして。

「明日は入学式だっけ？」

「うん。朝は九時登校だって今日言ってた。」

「そっか：春音も、早めに寝てね：おやすみ」

「おやすみ」

私が答えると、両親はそっとドアを閉じた。私は棚の上に置いてある花の飾りのついたヘアピンを見つめ、ベッドに倒れ込んだ。そしてゆっくりと瞼を閉じる。いつの間にか眠りについていた。

アラームの音で目を覚ます。時計を見ると、六時だった。今日はもう少し遅く起きてても平気だったのに：設定をそのままにして寝たのか。二度寝して起きられなくなるのも怖いので、少し早いけど準備をすることにした。

すると、メッセージが届く。合唱部の顧問からだ。

「今日の練習場所が、視聴覚室に変更になりました。入学式が終わったらお昼を持って来てください。他の部員にも共有お願いします」

ああ、そうだ。明日は放課後に部活がある。来週のミニコンサートの練習をするとか言っていたかな。

「今日の部活は視聴覚室に変更になりました」

それだけを合唱部員たちに送った。：今日の部活、どうしようか。一週間後にミニコンサートが迫っている中、欠席するのは避けたい。特に私は指揮者だから、休んでしまおうとかなり

迷惑がかかるだろう。でも、合唱部には、春奏もいた。治療の影響で声が出にくくなって、だからやめた方がいいとみんな言っていたが、それでもやりたいと言って：前より声が低くなったから、パートをテノールに変えてたな。家でも、「ハモりたいから、お兄ちゃんソプラノ歌って」とよく言われたな。おかげで声がすっかり高くなってしまった。見た目がそっくりだったのもあり、「話してる人が逆に見える」と言われたこともあったな。

そこまで考えて、ふと、棚の上のヘアピンを髪に当てて鏡をしてみる。

「よくそっくりって言われたけど：あんまり似てないな：」

春奏が隣にいた頃はそっくりに見えていたのに。

「あつ、時間！準備しないと遅刻する！」

いつもより少し大きめの声で言って、無理やり気持ちを切り替える。

その声も、やっぱり春奏の声とは似ていなかった。

入学式の後。視聴覚室のドアを開けると、すでにみんな集まっていた。

「今日は一旦来週のミニコンサートの話をしてから昼休憩、そのあとに練習にしよう」

顧問の先生がそう言って、ホワイトボード用ペンを取り出した。

「まず、ミニコンサートをやる日は14日：の予定だったんだが、その日は吹奏楽部のコンサートになったので、合唱部は翌日、15日の昼休みに変更となった」

え…。14日ではなくなった？14日は、春奏の誕生日だったのに：その日に演奏できるねって、春奏とも話していたのに：。

「先生、14日に戻せないんですか？」

部員の一人が言う。

「中庭で演奏するから、雨予報ではない14日にしか吹奏楽部ができないそうで…。合唱部は渡り廊下でもできるから、と」

「そんなの中庭以外でよくないですか!？」

「中庭以外だと一年生の教室に届かないから良くないとのことだ」

もともと、この時期のミニコンサートは一年生の勧誘も兼ねている。それは吹奏楽部も同じなのだろう。仕方がないことだ。それは分かっている。

「：先生。本当に、戻せないんですか？」

少しの可能性に縋って、聞いてみる。

「吹奏楽部と話し合ってみれば、できる可能性もあるが：」

それでもいい。たった1%でも、可能性があるのなら。

「吹奏楽部って、今日、活動ありますよね？話してきます」

「えっ。お、おい、志木!？」

先生は驚いてるけど、構わない。

「…先輩…そうですよね…そうですよね！俺らも行きます！」

「僕も！」

「うちも！」

後輩達も来てくれた。

「みんなで、ミニコンサートを元の日にしよう！」

おー！と、みんなで手を挙げる。今の自分たちなら、なんでもできるような気がした。

「結論から言うと、それは難しいかな」

吹奏楽部の先生に話したが、ダメだった。

「日にちを変えるときも言ったんだけど、晴れてるのってその日しかないんだよね。で、雨が降っちゃうと吹奏楽部は演奏ができないから、この日しかできないっていうこと。」

それは分かっているけど。

「合唱部は、最悪雨降ったら渡り廊下でできるでしょ？途中で降っても、ピアノだけ運べば平気だし。」

その通りだけど。でも、そうじゃない。

「だから、悪いけど変えるのは…」

「違います」

気がついたらそう言っていた。

「何が違うの？」

先生はきょとんとしている。そりゃあそうだ。この先生は私と春奏のことを知らないから。

「私は、晴れている日がいいんじゃないかって、14日がいいんです」

先生がなぜ？という顔をしている。

「たとえば大雨だったとしても、14日がいい。14日は、私の妹の誕生日なんです」

「それは…おめでとう。でも、そのこととなんの関係が…」

…学校って、生徒に何かあったとき、全先生に共有するわけじゃないんだな…。

「…それ、は…」

私が言いづらそうにしていると、後輩の一人が言った。

「先生、もう、やめてあげてください。先輩には、その日でなくてはならない理由があるんです。そして、俺らもそれに賛成しているんです」

「そうです！お願いします、ミニコンサートの日を元に戻してください！」

私たちの必死の訴えも虚しく、ダメと再度言われてしまった。

「おかえり、どうだった…って、なんか暗いな。ダメだったか？」

「はい…」

「…志木の気持ちは分かるよ。14日がいい理由、妹の誕生日だから、だろう？」

その言葉に、私はぱっと顔を上げる。やっぱり、顧問の、私たち兄妹を知っている先生は分かってくれていた。

「そうだな。うん…よし！こっちの方で、14日に戻せないか聞いてみるよ。」

「本当に…？」

「ああ。生徒たちがこんなにかて戻そうとしているんだ。先生が動かなくてどうする！」

「先生…！」

良かった…。先生が言ってくれるなら、少しは日にちを戻せる可能性も上がるだろう。

「それじゃあ、一旦昼ご飯を食べたら、ミニコンサートの練習をしよう。一時間後くらいに戻るよ」

あとがき

ここまで読んでくださりありがとうございました！

書き終わらなかったため、「ブラコン少女をおとしたい！」はお休みします。

ここだけの話ですが、この第二号は「あの日夢見た海に」と「春色コンダクト」のキャラを紹介するために大急ぎで作りました。

ちなみに、文芸同好会の人たちの間では、作品を略称で読んでいます。「ブラコン少女をおとしたい！」は「ブラコン少女」、「悪魔に恋しちゃダメですか？」は「あくこい」、「あの日夢見た海に」は「ゆめうみ」、「春色コンダクト」は「春コン」、「堕天使ちゃんの休息講座」は「だてきゆう」、「インドア姉弟の日本旅行」は「してりよこ」と呼んでいます。

次回はハロウィン特別号の予定です！どの話が載るかはお楽しみに！

感想は…話せそうなら本人に言ってくれとかなり喜びます。